

曾野綾子

緑の指

ガーデニングの
愉しみ



●著者

曾野綾子(その・あやこ)

1931年東京生まれ。聖心女子大学英文科卒業。53年作家の三浦朱門氏と結婚し、翌年「遠来の客たち」が芥川賞候補となり文壇デビュー。以来、人間の罪と欲望、信仰、家族、老い、教育など幅広い分野で小説やエッセイを発表。その一方で、各種審議会委員や「日本財団」会長として精力的な社会活動を展開している。79年ローマ法王庁よりヴァチカン有功十字勲章受章。その他数々の賞を受ける。著書に『狂王ヘロデ』（集英社）、『神の汚れた手』『誰のために愛するか』（以上、文春文庫）、『現代に生きる聖書』（日本放送出版協会）、『「いい人」をやめると楽になる』（祥伝社）、『安逸と危険の魅力』（講談社）、『夫婦、この不思議な関係』（PHP文庫）など多数。



PHPエル新書

緑の指

ガーデニングの愉しみ

PHPエル新書 001

2002年 4月19日 第1版第1刷発行

●著者 ————— 曾野綾子

●発行者 ————— 江口克彦

●発行所 ————— PHP研究所

東京本部 〒102-8331 千代田区三番町3番地10

新書出版部 ☎03-3239-6298

普及一部 ☎03-3239-6233

京都本部 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11

PHP INTERFACE <http://www.php.co.jp/>

●制作協力・組版 ————— PHPエディターズ・グループ

●印刷所 ————— 凸版印刷株式会社

●フォーマット・デザイン ——— 渋谷育由

©Sono Ayako 2002 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN 4-569-62044-2



PHPエル新書

緑の指

ガーデニングの愉しみ



曾野綾子

緑の指 もくじ

海の見える庭で	8
異郷に咲く	13
早春の青茎考 せいけいこう	18
バオバブ讃	23
その花の名前	27
愛と許しの風景	32
寛大さについて	37
オアシスの家族	42
夕暮れまでの花	47

土蜂の巣 52

夜露もなしに 57

筍の都合 62

道楽の限界 65

時間の高さ 70

熱帯雨林の恐怖 75

ふてくされて絵になる女 80

すべて折り合い 85

風の中のトビの巣 89

淘汰の世界 94

痩せた土地の祝福 98

黒い真珠 102

天上の青 107

酔芙蓉の顔色 112

宿題を終えた夜 116

五十年後 120

平凡で偉大なこと 124

窓辺のトマト 127

傘の下の牡丹 132

ソラマメの先っぽ 136

買い手は鼻、売り手は誠実 141

達人の条件 146

花との離婚 151

悪魔の花 155

お化け南瓜 160

お医者の木 165

農業スパイ 170

農村の快感 175

春を告げる木 180

豆蒔きは三文の得 185

驚きの季節 190

あとがき

緑の指

海に見える庭で

英語で、植物を育てる才能のことを「緑の指（グリーン・フィンガーズ）」と言うのだそう
だ。私も自分にやや緑の指的才能があるかもしれないと思うことはある。しかし私の場合
それは思いこみの楽しさなのだ。

現在も私は東京に住んでいるのだが、今から三十年も前に、三浦半島の西海岸の海辺
に、週末用の家を建てた。とにかく海が好きだったのである。まだその頃、付近には海岸
の波うち際にたった一軒、戦前からの別荘があるだけで、他に家らしいものもない土地だ
った。

私は若い時から社交的な生活を恐れる一面があつた。隠遁の暮らしがいいというほど筋
が通っているのでもないのだが、この海と風の音に包まれた土地へ来ると、私の気持ちは
不思議と落ちついた。

そこは縄文時代から、人間が住んでいた証拠のある土地で——つまり三戸式土器と呼ばれる土器の破片が出土する場所で——ということは、昔から暮らし易かったのだろう。人間が住み始めてから七千年は経ったと思われる土地だから、耕作の歴史もかなり古いのだろう。土はまるでチョコレートチョコレートの粉を撒いたようなすばらしい黒土であった。

その頃私はかなり忙しい作家生活を続けていた。この海辺のうちへはよく来たが、庭をいじる心や時間の余裕などは全くなかった。

しかし運命は私にもろい準備をしてくれた。五十歳直前になって、私は眼が見えなくなりかけたのである。私は生まれつきの強度の近視だったが、まるで「弱り目にたたり目」のように眼病が続いて起き、読むことも書くことも不可能になって来たのである。

手術をして完全によくなる。あまりばつとしないが、少しはいい状態に戻る。手術後もっと決定的に悪くなる。この三つの未来が私を待っていた。私はその不安な未来の予感の中間地点を漂っていた。

執筆を止めると、私はすることがなかった。家事は嫌いではない。料理は好きな方であった。しかし長年、男と同じように働いていた私に代わって、うちには奥さんの役目をし

てくれる人もいたので、私は彼女の仕事を取り上げることもできないのであった。

私は、講演だけは少し続けていたが、眼が悪くなったからと言って、急に「講演屋」になるようなことはしたくなかった。私は原稿書きに使っていた心と時間を、海辺の家で、木を植え、野菜の種を蒔き、花を育てることに向けるようにしたのである。とは言っても、文字通り手さぐり園芸である。草取りでも細かい草は視力がないから取ることができない。サヤインゲンやトマトに竹を立てて紐を結んだり、肥料を運んだり、抜いた苗を捨てに行くような雑仕事だけしか私にはできなかった。作家というものはペンより重いものは持ったことがないなどというのは全くの偏見で、あらゆるプロの仕事は、体力がなくては勤まらないものだろう、と思う。私は体を動かすことにかけては、むしろ自信があった。

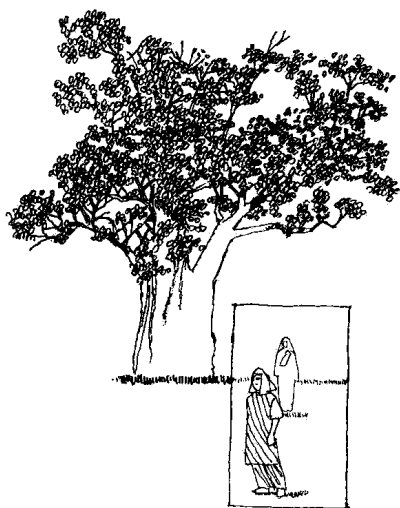
やがて私の眼の手術は、最良の経過を辿ることになった。私は前よりもいい視力を与えられたのである。すると眼が悪かったからしかたなく時間つぶしにしていた土いじりが、改めておもしろくなって来た。

眼の悪い時、私はやたらに木を植えた。いや正確に言うと、植えてもらっていたのであ

る。イチジク、ビワ、ブルーベリー、キウイ、桜、柑橘類、それからフェンスに沿ってノウゼンカヅラとバラ。

その中で、消えたものもあり、すばらしく定着したものもある。イチジクは枯れ、ビワは高く繁って摘果もできないので、小粒の実が鳥のごちそうになるばかり。バラは病気ばかり出て諦め、ノウゼンカヅラは自称三浦半島一の花を咲かせるようになった。キウイは雌が四本あるので、樹勢がついて来たここ数年は毎年五、六百個はなる。桜は「おかめ」という名の台湾緋桜で、初めは惨めだったが、十五年ほどたった今、その下でお花見をしてもどうにかかつこうがつくようになった。ブルーベリーははびこり過ぎて切ってしまつて、今では少し後悔している。柑橘類は、四本の蜜柑の成木、三本の若いレモン、二本のみごとな橙、一本のひねこびれた金柑、をいれて二十本近くあり、去年あたりからは毎年二百キロほどは採る。自家製のマーマレードを作ると、これはまた天下一品の味だった。私はだんだん鋤を取って、自分で野菜を植えるようになった。しかし今でも鋤を使うことは一番苦手で、畝をうまく作ることができない。時々しゃがみこんで、板片や移植ごで曲がったところをごまかしたりする。人にはみせたくない光景である。

しかし、畑をするようになってから、私は植物を育てる力はほとんど人間でないことを知るようになった。それは風であり、土であり、陽であり、雨であつた。ほんとうの緑の指の持ち主は、私の信仰から言うと、神だけだったのである。



異郷に咲く

ザイール（一九九七年にコンゴ民主共和国と改称）に、難民として流れ込んでいるのは、ルワンダの二つの部族、フツ族とツチ族のうち、主にフツ族だという。ツチ族を百万人も殺したのはフツ族だと言われている。

「どっちもカトリックなのに」と声を潜める人がいた。

「愛とか許しとかはどうなったんでしょ」

私だって、いざとなったら「やられたならやり返せ」の論理になりそうな性格なので人のことは言えない。しかし教会も信仰も無力なことを見せつけられるのは、確かにあまり愉快なことではない。

難民のことを「デイスプレーズド・パーソン」と言うのだそう。つまり「本来いるは

ずでない場所に、強制的に移された人」というような意味であろう。そして植物の世界でも、このディスプレイ・スト・プラントがよく発生する。

私の庭いじりの主な場所は海辺である。フェンスのすぐ外に海が見える。海拔二十メートルほどの台地の上だから、いちおう潮を被ることは^{かぶ}はないが、それでも潮風に吹きさらされている。海の傍には向かない、或いは海の傍ならいい、という植物のことを記した指導書はほとんどなかった。それで私は今まで、どれだけ素人の試行錯誤を繰り返さねばならなかったかわからない。

ボケと石楠花^{しやくなげ}を考えてみる。石楠花と言ったって西洋石楠花である。その二つは、海辺でもどうやら生きてはいるが、もともとは山の植物だから不機嫌さを隠さない。立ち葵^{あおい}もアメリカ芙蓉^{ふぎよう}も咲かないわけではないが、東京では考えられないほど葉巻虫がついたり風で葉が傷^{いた}んだりする。

梅と桜もだめだと言われたが、熱海の梅園は有名だし、海辺の山に桜が咲いている光景は見たことがあるような気がする。ただ静岡の蜜柑や長崎の茂木のビワほど、海辺が好きという証拠がないだけだ。

海の好きな植物でもあるのである。

その筆頭は、当然のことだが、椰子類である。わが家の庭にある二本のワシントン椰子は高さが十メートル以上はある。三十年前に家を建てた時に、ちょうど庭箒ほどの大きさで七千五百円もすると言われて、覚悟して二本買ったのが、堂々たる南国情緒の木陰を作っている。お世辞だろうが、いつか或るヨットマンが、「三浦半島の西海岸には入江がいっぱいあって、馴れない者にはちよつと見分けがつかない時があるんだけど、お宅の二本の椰子が見えたら、それが小網代湾なんですよ」と言ってくれた。

びっくりしたのはエリカである。小さな鉢植を四つ買って、初め東京の家の窓辺に飾った。正直言つて評判はよくなかった。ほろほろ花が落ちるのである。やや追放される感じで海辺へ持って来て露地植えにした。すると私の肩くらいまである茂みにのびのびと育ち、旺盛な花を咲かせた。

しかし何と言つたつて最大のヒットは、プロテアとその仲間であつた。日陰がない土地だから、そもそも陰影に富む山野草など無理なのである。かそけき風情の山野草たちと正反對の、ただけしいほどの強さがプロテアの特徴なのである。